

開催日時：2022年8月4日（木）15:00-17:00

開催場所：オンライン会議

参加人数：20名程度

議論の主なテーマ：「『総合知』の基本的考え方及び戦略的な推進方策 中間とりまとめ」に対する疑問や効果的な方策・課題等について参加者よりご意見を伺う。

プログラム概要：

- ・内閣府 「『総合知』の基本的考え方及び戦略的な推進方策 中間とりまとめ」ご説明
- ・総合知に関する意見交換

意見交換における主な意見

（場の構築）

- ・コーディネートする人材が必要。議論する風土を作る。
- ・サービスサイエンスに関心を持った人が起点になり、話が進んだ。融合して何をやるかを早くから決めてやるべき。WHATが重要。
- ・研究者・技術者同士の交流が生まれるように、ABW（Active Based Working）を取り入れ、場の構築、イノベーションの推進を進めようとしている。
- ・総合知のイメージ図でいうと、産業界では下流の複雑な課題を解くところで知が必要であり、その際、産官学だけでは困難であり、市民を巻き込んだ取組みが必要だと考える。
- ・「つなげる30人」や、一橋大学の社会学大学院 科学と社会の未来センターは参考になる。大学生主体、産業界、民間から人を連れてきて、新しい社会課題、次の世代で起こるような課題について議論をするという研究会がある。心の豊かさみたいなものを創るのも重要な要素。アート、芸術を取り入れる必要があるのではないか。

（人材育成）

- ・デュアルディグリーで、総合知の上流で活躍する人を育てるべき。若い人で社会に役立ちたいという人は多い。そのような志を生かすような仕組みも必要。
- ・仲介役コーディネーターを育てる必要がある。コミュニケーション力教育が必要。

意見交換における主な意見

（人材育成）

- ・研究者・技術者同士の交流が生まれるように、ABW（Active Based Working）を取り入れ、場の構築、イノベーションの推進を進めようとしている。人材育成には、長い時間を要するため、このような場も活かしていただけたらと思う。
- ・海外では、デュアルディグリー、マルチディグリーの方がいて、横串で、上流・下流で活躍される方がいるので、そのような方を増やしていくというのはあるのではないか。
- ・融合では、どちらか一方が越境していく必要があるため、マルチタレント的な人を増やしていくことは将来的には効くのではないか。
- ・社会貢献の意識が高い若手が増えているように見える。そのような若手の志を活かすように会社を運営することが経営課題にもなっている。

（人材登用（評価））

- ・人の評価は単に新しいことをやったではなく違う人を巻き込んできたということも評価することが必要。
- ・大学では教授への推薦や、コーディネーター・ファシリテーターをキャリアにするなどにおいて、内閣府や文科省のアクションが必要。

（問いたて）

- ・融合しようよと言うだけではダメでWhat（何をするか）が明確でないと、人文・社会科学の先生がワークしない。Whatを具体的にどんどん打ち出していくことが、よくワークするパターンである。

（総論）

- ・制約がありながらも、満足感を高めるにはどうすべきか、そのような観点でwell-beingを考える必要がある。
- ・高度成長期は、様々な制約からの解放。地球温暖化やエネルギーの問題等が顕在化してきた中、今後は制約の中でも、ひとり一人の幸せ、well-beingを考える必要があり、技術開発のみならず、何をやっていくか、多様な知識・経験を集めることが重要であるといったことを、COCNでは議論している。
- ・昔はモノを対象に科学が発展してきたが、今や人と社会を対象に科学が発展していかなければならない時代になり、人・社会に対しては法則がないことから、人や社会に対して知見を持っている人文系が不可欠である、そのような社会課題に我々は取り組む必要があるとの説明に落ち着いてきた。